



日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の対照研究―語構成の異同と文法的振る舞いを中心に―

藤原, 優美

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2013-09-25

(Date of Publication)

2014-09-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第5978号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005978>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式3)

論文要旨

氏名 藤原 優美

専攻 グローバル文化

指導教員氏名 湯淺 英男 教授

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の対照研究

—語構成の異同と文法的振る舞いを中心に—

論文要旨

中国語では、漢語を用いて表現する。現代日本語でも、表記の1つとして漢字が使われている。また、日本語と中国語には、「科学」、「文化」などのような、字形が同じである語、つまり同形漢語が多数存在している。しかし、同じ漢字で書かれていても、日本語としての意味と中国語としての意味が常に同じとは限らない。しかも、日本語と中国語の同形漢語の文法的ズレもよく見られる。その理由としては、中川 (2008) では、同じ語に対する日中両言語での解釈が異なるためであると指摘している。こうした日本語の漢語の使用状況を踏まえて、本研究では、2字漢語を用いた日本語のサ変動詞と中国語における同形漢語の文法的な立場を比較対照し、中国語母語話者が日本語を学習するに際して、どのような文法的事項に留意すべきかを考察した。

一方、これまでの漢語動詞、いわゆる日本語のサ変動詞の語構成研究では、造語パターンを分類・整理することに重点が置かれており、その動詞が統語的にどのように振る舞うかという研究は遅れているが、森田 (1995) では、漢語の語構成の観点から自他の問題について議論し、「漢語の文法的研究は語義論をベースに行わなければ新しい展開は望めないであろう」と指摘している。本研究においても同様の視点に立ち、漢語の自他性を考察する際には、語の構成要素から分析することとした。

特に、日本語のサ変動詞に用いられる2字漢語は中国語ではどのような品詞になるのか、2字漢語の個々の構成要素は中国語ではどのような文法的特徴を持っているのかを明らかにした。そして、日中両語において2字漢語の語の構成要素と動詞自他性との関わりにつ

いて考察し、同時に日本語のサ変動詞の自他性とそれに対応する中国語の2字漢語動詞の自他性の異動も見た。

以下、各章の内容を簡潔に要約することとする。

第1章では、上記の観点に立って、研究目的と研究方法について述べた。とりわけ日中同形漢語の意味的文法的違いを提示しつつ、同時に語の構成要素について考察する必要性も指摘した。

第2章では、まず日本語の語集体系の中で漢語がどのような存在であるかについて述べ、中国語母語話者が日本語学習に際して、漢字がどのような影響を持つかについても指摘した。また、本研究で対象とする日本語の漢語については「2字漢語+スル」の形に限定することの述べた。

第3章では、日中同形漢語のそれぞれの構成要素に基づく日中両語の対照の可能性について論じた。日中両語の2字漢語の個々の語の構成要素の品詞性について、先行研究を紹介するとともに、個々の品詞の日中対照の難しさも示した。

第4章では、日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の2字漢語について主に品詞性を中心に比較対照した。まず本研究の調査対象となるサ変動詞を提示するとともに中国語の品詞の分類基準についても検討した。また、日本語ではサ変動詞になるが、中国語ではどのような品詞になるのか、その品詞になる語の構成要素はどのような文法的特徴を持っているのかを明らかにした。例えば、日本語ではサ変動詞となるが、対応する中国語の2字漢語の中には動詞のほかに、名詞、形容詞、副詞となるものがある。さらに、中国語の2字漢語で動詞となるものはすべて構成要素に動詞要素が入るが、名詞や形容詞になるものの中には、それぞれ名詞要素や形容詞要素の入っていない2字漢語が存在することがわかった。

第5章では、日中両語において、2字漢語の個々の構成要素と動詞自他性との関わりについて分析するとともに両言語で比較対照した。まず、日中両語それぞれにおける自動詞と他動詞の基準を検討した。上記の第4章で分析した構成要素に基づいてまず、2字漢語を用いた動詞を各タイプに分類した。そして、日中両語で同じタイプとなっている2字漢語の動詞を取り上げ、構成要素となる動詞の自他性と2字漢語としての動詞の自他性との関わりなどを分析・考察した。これによって、日中両語で同じ構成要素を持つ2字漢語の動詞を比較対照することとなった。とりわけ、日中両語においてAV型とMV型となる個々の2字漢語については、自他性に関しては日中両語で一致することがわかった。また、VN

型となる2字漢語については、中国語ではすべて自動詞となるが、日本語のサ変動詞では自動詞、他動詞、自他両用動詞の使われ方がされている。

第6章では、ここまでの分析結果を踏まえながら、中国語母語話者がサ変動詞の自他性をどの程度理解しているかを確認するために、アンケート調査を行った。1つ目は自他性に関わる格助詞を選ばせる問題であり、2つ目は日中同形漢語を提示して作文させる問題である。結果として、中国語母語話者にとっては、日中両語で語構成も自他性も同じであるサ変動詞が習得しやすいなどのことがわかった。

第7章では、本研究で得られた2字漢語の語構成と動詞の自他性との関わりについて分析の結果などに基づいて、今後の中国語母語話者の日本語学習についていくつかの示唆を行った。

論文審査の結果の要旨

氏 名	藤原 優美		
論文題目	日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の対照研究 一語構成の異同と文法的振る舞いを中心に一		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	委員長	教授	定延 利之
	委 員	教授	湯浅 英男
	委 員	流通科学大学 客員研究員	中西 泰洋
	委 員		印
	委 員		印
要 旨			
本審査委員会は、藤原優美氏の提出した「日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の対照研究一語構成の異同と文法的振る舞いを中心に一」という題目の論文（以下、本論文と記載）を審査し、以下の結果を得た。 本論文は、現代日本語コーパス及び複数の国語辞典を用いて、サ変動詞として用いられる使用頻度の高い日中の2字同形漢語425語を抽出し、それら同形漢語の日中両語における品詞性の異同を分析すると共に、2字漢語の各構成要素の品詞論上の組み合わせや文法的関係の日中両語における異同、さらには2字漢語が動詞として用いられる場合の自他性の差異について比較対照し、中国語母語話者の日本語学習における誤用とこれら同形漢語の日中両語における文法的差異との関わりについて明らかにしたものである。 本論文は全7章から構成されており、第1章では本論文の研究目的と研究方法が述べられる。そこでは研究対象となる日本語サ変動詞の2字同形漢語が、国立国語研究所の現代雑誌のコーパス（2006）の上位5000番までの2字同形漢語1205語を基にしながら、『明鏡国語辞典（第2版）』『大辞泉』『大辞林（第3版）』を参照して抽出した425語であることが述べられる。また第2章では、日中同形漢語の日本語語彙体系内での位置付けや、日本語のサ変動詞の文法的性格			

について論じられる。さらに第3章では日中同形漢語の語構成に関する先行研究を検証し、日中両語間での比較対照の可能性について考究される。そこでは、日本語の2字漢語の構成要素や、中国語の「語」の種別及び「語素」の意味的分類について検討され、日中共通の構成要素として「名詞要素(N)」 「動詞要素(V)」 「形容詞要素(A)」 「副詞要素(M)」が比較分析上の概念として提示される。また中国語の場合、個々の漢字の品詞性が2字漢語全体の品詞性に影響を与えていることや、複数の品詞にまたがる漢字の存在が比較対照の難しさとして挙げられる。なお構成要素間の日中共通の文法関係としては、「修飾関係」「補足関係」「並列関係」「対立関係」「反復関係」が示される。

第4章では、日中それぞれの品詞分類に関する先行研究が検討され、同形漢語の品詞論上の対応関係や、前字・後字の各品詞性や文法関係の比較対照が行われる。そしてサ変動詞の2字同形漢語が中国語では名詞、動詞、形容詞、副詞に相当するほか、複数の品詞にまたがる場合のあることが明らかにされる。さらにサ変動詞と対応する中国語においては、名詞となる漢語で名詞要素を含まない場合があることや、動詞となる漢語の場合にはすべて動詞要素を含んでいることが解明される。

第5章においては、2字同形漢語における自他性の異同が考察される。日中両語の自他性のそれぞれの基準を検討したあと、サ変動詞となる2字同形漢語について、VV型、AV型、MV型、VN型、VA型、NV型のVの自他性と2字漢語全体の自他性との関係を言語毎に分析したのち、日中両語の関係が比較対照される。VV型においては日中両語で、構成要素Vの自他性と全体の自他性との関係が異なる場合が多いこと、AV型、MV型においては日中両語で自他性の関係が同じになること等が明らかにされる。

第6章では、2字同形漢語を用いたサ変動詞を中国語母語話者が学習する際に生ずる誤用に関し、第4章、第5章の結果を踏まえながらその生起の度合いについての仮説を立て、中上級学習者37名に対する格助詞の選択問題及び作文問題でそれを検証し、同形漢語の自他性の習熟度を確認した。最後の第7章では、本研究の結果に基づいて、サ変動詞の学習に関し2字漢語の語構成に即した学習時期の提案を行なっている。

なお、本論文とも関連のある同形漢語に関する下記の査読付き論文(単著、執筆名は熊薇)が採録されており、本論文が当該領域において学術研究の水準を満たしていると判断できる。

- (1) 「サ変動詞と対応する中国語の品詞性」、『国際文化学』(神戸大学国際文化学会編)、第25号、2012年3月、pp.43-56.
- (2) 「关于日汉同形异义词学习的考察」、『金田』(中国広西玉林市文聯)、第298号、2012年11月、pp.228-229.
- (3) 「VV型の日中2字同形漢語の自他性について」、『国際文化学』(改組により神戸大学大学院国際文化学研究科編)、第26号、2013年3月、pp.105-120.

本研究は、サ変動詞に用いられる2字同形漢語について、前字・後字の構成要素の日本語・中国語における文法的特徴に着目しながら品詞性及び自他性に関する日中両語の関係性を研究したものであり、サ変動詞に用いられる同形漢語の文法的性格について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって、学位申請者藤原優美氏は、学位(学術)の学位を得る資格があると認める。